**「妻の自分探し」には様々な形がありますが、
夫にとって「妻の子連れ留学」は、その究極の形かもしれません。
そこでまず、「旅立った妻」を「見送った夫」の本音を聞いてみました。**

「離れてみて主人の良さと、存在の大きさに改めて気づけた」とるりさん。ご夫婦は今年、結婚14年目を迎えるが、その歳月の中で「妻の留学」で離れた5年間は夫婦の関係を新たに築くための大切な転機になったという。

第2回登場・万浪るりさんのご主人 **万浪靖司さん**

「妻の留学は、僕にとっても刺激に」

「妻から息子を連れて留学したいと切り出されたときは、特に驚くこともなく、ごく普通に『行っておいで』と答えましたね」

多くの場合、妻から突然「留学」を持ちかけられた夫は、うろたえてしまうものだろう。しかし、靖司さんは、意外にも冷静に妻の言葉を受け止めているのだ。

「もともと、うちの奥さんは家庭の中でじっとしているというより、人生の目標を決めて全力で向かっていくタイプなんです。ですから、もし夢を断念させれば、『あのとき行っておけば』という後悔が妻の中にきっと残る。そういう気持ちを抱えて結婚生活を続けるより、お互いのためにも、行くなら必ず卒業して帰って来いと、気持ちよく送り出そうと」

さかのぼること8年前。客室乗務員を退職後、育児に専念していたるりさんは、「一生もののの仕事を見つけたい」と留学を決意。妊娠中ですら資格取得の勉強に励んでいた妻の「熱さ」を間近で見ていた夫は、だからこそ、妻の意志を尊重した。と同時に、それは当時2歳だった「息子のためにもなる」と考えての決断だったという。

「僕らの時代と違い、息子が大人になるころには、一流大学から大手企業に入るだけの人生設計は、もう通用しなくなる。そういう時代の中で生き抜くためにも、当たり前に英語が話せ、キラリと光る個性を身につけて欲しかったので、子供時代の海外生活は息子にとっても財産になると」

こうして、「子連れ留学」は実現の運びとなり、留学先は治安の良さから、州立ハワイ大学を選定。靖司さんは事前の下見のみならず、入学時にもハワイまで見送り、「自分の目で安全を確認した」という。その姿からは、妻子への深い愛情が感じられるが、逆にその分、妻子と別れたダメージの大きさも想像されるところだが……。

「一人で帰る機内では淋しいというより、また来ればいいという心境でした。仕事も忙しいですしね。でも、実際は頻繁には行けなかったな。妻子への生活費は〝自動送金〟で僕の口座からハワイに送られていきますからね。残念ですが休暇のたびにハワイに行っていたら、お金が持ちません（笑）」

ユーモアたっぷりに靖司さんは言ったが、一人暮らしが始まってからも、そう不自由は感じず。妻が事前に頼んでおいた家政婦さんも「来てもらうと、その時間、僕も家にいなくてはいけないから不便で」と、ほんの2～3回で断わってしまったほど。掃除、洗濯もすべて自分でこなした。ここまで違和感なく一人暮らしになじめたのは、商社マンという仕事柄、「結婚以来ずっと多忙で、家族団らんを楽しむ暇もなかった」こと、そして、会社でも単身赴任で頑張っている先輩が当たり前の

'04年5月号・万浪るりさんの場合

新 二度目の自分探し ②

取材＝中山みゆり

勉強と育児に集中するために選んだ「子連れ留学」という選択

万浪るりさん

**「なにか始めたい」けれど
「どうしたらいいかわからない」「気持ちの踏ん切りがつかない」
そんな30代の女性たちの声をよく耳にします。
今回取材した「子連れ留学」は、
ある意味、今の状況から抜け出す〝第一歩〟の
新しい形なのかもしれません。**

誠実な話し方、上品な笑顔。職業によるイメージがあるとすれば、万浪るりさんは元スチュワーデスらしい印象の女性だ。

大手航空会社の国際線客室乗務員として勤務していた彼女は、24歳で結婚。2年後に退職して家庭に入り、28歳のときに長男をもうけた。

公園デビューにママ友達とのランチ。出産後は絵に描いたような育児ライフを送っていた。ところが、長男が1歳のころ、るりさんが決断したのは「子連れ留学」への道――。なぜ、彼女は子供を連れてまで、あえて留学しようと考えたのだろう。

「本当は子供を産む前に、自分はいつでもこれを始められる、という〝一生もの〟の仕事を見つけるつもりでした。客室乗務員を辞めたのもそのためで、退職後は通訳ガイドの資格と英検1級の合格を目指し猛勉強していました。でも、どちらも超難関の試験なので、簡単には受からない。結局、資格取得をあきらめる形で子育てに入りました。やり残した〝宿題〟を抱えたまま家庭に入ったからでしょうか。育児を楽しみながらも、このまま母親だけで終わってしまう焦りが日増しに強まってきて。そのころから、何か専門分野を磨き、将来の社会復帰に備えたいと、張り立てられるように留学へと気持ちが傾いていったんです」

しかし、子連れ留学をするにしても、オムツも取れていない赤ちゃん連れでは、ママの負担が大きすぎる。彼女が「今」にこだわった理由を知りたいところだ。

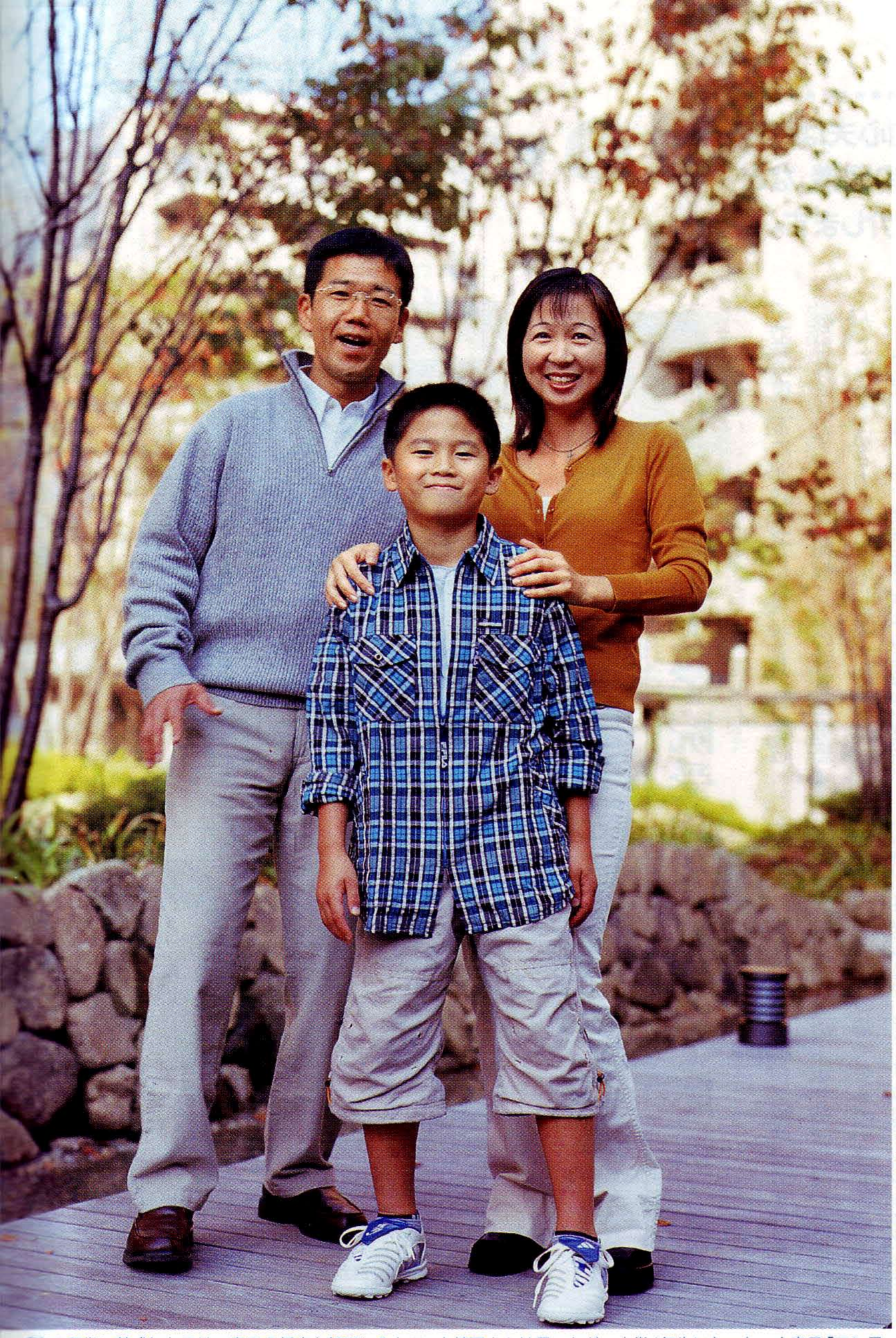
「育児が一段落するのを待って留学したのでは、その分、社会復帰の時期が遅れてしまう。年齢を重ねた分、不利にもなる。子供の手が離れたタイミングで仕事を再開するには、育児と同時進行で勉強する必要がありました。日本での復学も考えましたが、子供に手がかかる時期なので、それでは中途半端に終わりかねない。勉強と育児だけに集中するためには、やはり留学が一番だと。それに、子供にとっても物心がつく前なら、英語や海外の文化を自然に吸収できる。そういう意味でも、2人にとって『今』がベストだと考えました」

留学の意思を固めた彼女は、夫を始め、夫の両親や実家の両親にも相談を持ちかけた。

彼女の決断は、家族にとっては、最愛の息子や孫と何年も離れ離れになることを意味する。その点を十分に考慮して、時間をかけて自分の気持ちを家族に伝えたという。

「主人は、もともと友人には家庭にいてほしいタイプなので、本音は反対だったと思います。でも『行ってこいよ』と賛成してくれました。世代的に反対されても当然の両親や義父母も、必ず無事で帰ってきなさい」と送り出してくれて。主人や親たちの優しさに胸が痛みましたが、今は甘えさせてもらおうと思いました。いい成績を残し、息子と

まんなみ るり さん ● 20歳東洋女子短期大学卒業。航空会社に客室乗務員として入社。24歳商社マンの夫と結婚。26歳お腹、資格取得のため猛勉強。28歳長男を出産。30歳ハワイ大学に子連れで留学。35歳大学卒業、帰国。36歳教育コンサルティング・アリス・インスティテュートにてウェブ関係の仕事を皮切りに、現在は親子留学コーディネータとして活躍中。



「妻の留学に賛成したのは、息子の将来も視野に入れて」と靖司さんは言ったが、小学4年生になった一人息子「ヨシ君」は、英語力はもちろん、撮影時にはカメラ機材を率先して持ってくれるほど、たくましい男の子に成長している。

ようにいたことも影響したという。が、単身赴任のようでも、明らかに単身赴任とは違う点を、靖司さんはこう指摘した。

「普通の単身赴任なら、夫は妻子のために頑張ろうと思うでしょう。でも、うちの場合、ハワイで妻子は、それぞれの収穫を得るために頑張っているわけで、ぼんやりしていたら僕だけが取り残されてしまう。実際、久々に会う妻は、生き生きとしていて、妻の充実振りが伝わってくるからこそ、僕自身も妻に負けないように、何か目標を持たなくてはと考えるようになりましたね」

その目標について、「ゴルフの腕がシングルになりました」と靖司さんは笑ったが、当時30代真っ只中、働き盛りの夫は、「妻子不在」のデメリットを、「仕事に没頭できる」メリットに置き換え、より仕事に打ち込んでいったという。靖司さんの言葉を借りれば、「それぞれが、自分の山を登るため」に。

しかし、「山登り」の道中では、様々なアクシデントが待っていたとも。

「子供が腕を骨折したり、母子で高熱を出し共倒れしたこともあって」。前回取材の折、るりさんは言ったが、留学から数年後、子供に物心がつき始めたころには、「どうして僕にはパパがいないの」と精神的な問題にも直面。「もう帰国しよう」と考えた時期もあった。

が、弱気になる妻を現地に留めたのは、他でもない靖司さんだった。「今帰国したら単なる自己満足で終わってしまう。必ず卒業して帰って来い」、一貫して言い続けたのだ。

「留学という一大決心をするにあたり、息子の問題は行く前から予測できたわけで、それがわかっていて留学を決めたのだから頑張って乗り切れと。妻の心痛を思うと、手を貸せないもどかしさもありましたが、これを乗り越えることで、必ず結果がついてくる、そう自分たちの選択を信じたんです」

夫の叱咤激励は、妻にとって何よりの支えになったに違いない。留学から5年後、るりさんは無事に大学を卒業。帰国から3年たった今、専攻していたコンピュータサイエンスのスキルと、子連れ留学の経験を生かし、親子留学コーディネーターとして順調に活躍の場を広げている。そして、小学4年生になった子供は、英語力はもちろん、海外生活で培ったのだろう、撮影時にはカメラマンの重い荷物を率先して持ってくれるほど、優しく、たくましい男の子に成長している。

その姿からは、家族それぞれの収穫が見て取れるが、もう一つ。「妻の留学」は「夫婦の関係」にも大きな変化をもたらせていた。

「当然ですが僕たち夫婦は、育った環境も、考え方も違います。仕事一つ取っても、会社という組織の中でチャンスをつかんできた僕と、新しい世界に目標を作り、突き進んでいく妻とは対照的ですよね。そういう生き方の違いが、妻の留学で埋まったわけではないんです。ただ、子育てと学業を一人で両立し、成し遂げて帰ってきた妻に、僕は自分が持っていないものを彼女が持っていることに改めて気づけた。そういう意味で、互いがより認め合える関係になれたと思っています」

前回、るりさんは取材の席で、自分の頑張りと同じ分量、夫への感謝を語ったが、靖司さんの言葉と合わせ、その意味が理解できた。

世間の常識や男のプライドにとらわれず、「妻の将来」を第一に考え送り出した夫と、「夫の気持ち」に応えた妻。そこには絶えず、「相手」への思いがあり、だからこそ、妻の留学は「認め合う」という大きな収穫を夫婦にもたらせたのだと。

（中山み登り）

妻への質問状

Q：留学で一番苦労したことは？
A：プログラミングの宿題

Q：留学で得た一番大きなものは？
A：経験と技術

Q：帰国後、夫婦の関係がどう変わったと思いますか？
A：いつも「TAKE」から、「GIVE&TAKE」になった（多分です）

Q：留学を通して感じた、夫婦に必要なこととは？
A：それぞれが自分らしくあり、互いを認め合うこと

Q：留学をしてよかったと思っている？（YESかNOで）
A：YES

夫への質問状

Q：妻が留学で一番苦労したことは？
A：子育て

Q：妻が留学で得た一番大きなものは？
A：達成感

Q：妻の帰国後、夫婦の関係がどう変わったと思いますか？
A：空気が、よりポジティブになった

Q：妻の留学を通して感じた、夫婦に必要なこととは？
A：お互いへの思いやり

Q：妻は留学をしてよかったと思っている？（YESかNOで）
A：YES